2017 年 9 月 20 日

博士学位論文審査報告書

主査　加藤洋介

副査　大島久雄

副査　リチャード・ホドソン

学位申請者　雨森未来
論文題目　　シェイクスピアの Late Plays とマニエリスム

審査の経過

2016 年 3 月に申請者から学位論文作成計画書が提出され、それを受けて審査委員は事前審査論文の査読をはじめた。2016 年 10 月に審査委員は申請者に対して口述試問を実施し、論文の問題点を指摘し、改稿にかんして指導した。その後、申請者は論文原稿を改稿し、審査委員から新たな助言と加筆の指示を受け、最終的に 2017 年 3 月 30 日に学位論文を正式に提出した。

2017 年 6 月 17 日に審査委員は申請者に対して口述諮問を実施し、論文の問題点について確認し、文章の表現等にかんする修正を指示した。

2017 年 8 月 9 日に最終口述諮問（公開）を実施。審査委員 3 名のほかに、教員と大学院生を含む 10 名が出席し、論文について質疑応答を行ない、最終的に論文は申請者が博士の学位を授与されるに十分に値すると判断した。

論文の評価

シェイクスピア劇を長く研究してきた雨森氏は、学位論文の論考の対象として『アントニーとクレオパトラ』、『アテネのタイモン』、『シンベリン』、『冬物語』、『テンペスト』を選択し、それらをシェイクスピアの晩年劇としてまとめ、再評価を試みた。氏によると、これらの晩年劇は過去のシェイクスピア批評においてしばしば構造的欠陥を指摘され、比較的低い評価を与えられてきたという。たとえば、『シンベリン』の最後の場面では長い台詞が冗長な印象を与え、作品の効果的な終演を損なっているとか、『アテネのタイモン』は共作者がシェイクスピア劇に異質な要素をもち込んだ結果劇全体の統一が損なわれていると考えられてきた。しかし、氏の考えでは、これらは晩年劇の価値を損なう欠陥でなく、むしろシ

ェイクスピアが晩年劇において意識的にとり込むようになった新しい創作の特徴であり、これをマニエリスム美学の実践として解釈することで晩年劇を再評価できる。本論文は、この考えにもとづいて晩年劇の新しい解釈と判断の視点を提示しようとした意欲的な試みだと言える。問題設定とそれにかんする議論を展開する手つづきは適切であり、学術論文としてよくまとめられている。マニエリスムというひじょうに大きな主題にとり組んだ点も、研究の視野を大きく拡大することになり、高く評価できる。マニエリスムの絵画を図版としてとり込んでいることもつけ加えておく。

序章では、シェイクスピア劇のマニエリスムにかんする先行研究が紹介され、先行研究に対する本論文の相対的位置、本論文で採用するマニエリスムの定義が示される。ワイリー・サイファーの『ルネサンス様式の四段階』からマニエリスムの定義をとり出し、氏がシェイクスピアの晩年劇全体に解釈の枠組みとして適用する図式を示す。ルネサンスは秩序と統一と均衡を重んじる様式であり、アルベルティの遠近法に代表され、それに対してマニエリスムは歪みと不均衡を特徴とする様式であり、シェイクスピアにおいてルネサンスの様式に対する対抗の手段になる。シェイクスピアは晩年劇においてサイファーがルネサンスという用語でまとめた文化様式への対抗の意識を強めた。その具体的実践が晩年劇であるという見立てである。今日、マニエリスムが多数の文献で論じられていることを考えると、サイファーのマニエリスムの定義は古いという印象を受けるが、氏はあえて解釈の枠組みを単純化して示すために、サイファーの古典的文献にもとづいてルネサンス対マニエリスムという図式を示し、それぞれの特徴を対比的に論じる。この点は評価の分かれるところであり、口述諮問において少なくとも同時代のマニエリスム批評の流れを考慮してマニエリスムを定義するべきだと指摘された。

第 1 章は、『シンベリン』を欺くことを主題とする劇ととらえ、劇に認められるだまし絵の効果を論じる。当時、ヨーロッパ大陸からイリュージョンの理論と実践例がイングランドにもち込まれ、その文化的関心が高まっていたことを指摘し、そのなかでシェイクスピアがだまし絵の効果を意識した劇の創作を行なったという。観客は、劇の最後の場面をだまし絵として受容するように期待されており、その効果が十分に生かされるように劇には様々な意匠が施されていると論じる。

第 2 章は『アントニーとクレオパトラ』を扱い、劇の主要な場であり対比的に描かれるローマとエジプトの二つの世界を、ルネサンス対マニエリスムという図式にしたがって解釈する。氏はイノバーバスの言語遊戯に着目し、彼の多義的言語が既存の秩序を脅かす効果をもつことを指摘し、それが秩序と統一と均衡を重んじるルネサンスの様式に対抗しようとしたシェイクスピアのマニエリスム的実践であることを論じる。一時期に盛んに行なわれたバフチン理論によるシェイクスピア批評とつながる議論であり、批評の発展の可能性を感じさせるもので興味深い。

第 3 章は、『アテネのタイモン』がシェイクスピアとトマス・ミドルトンの共作である点に着目し、共作がもたらした創作の多元的視点、異質な文体の効果をマニエリスム理論と関

連づけて論じる。伝統的な批評では、共作であることは偉大な劇作家シェイクスピアの作品の価値を下げるものとみなされてきたが、氏によると、マニエリスムのアナモルフォーズに似た効果を引き起こすという。アナモルフォーズは異なる複数の視点で対象をとらえ、そのうちの１つの視点から対象が歪んで見える効果をねらうものであり、視点を１点に固定する遠近法の矛盾を顕在化する。近年のシェイクスピア批評における共作の再評価を踏まえて議論を展開しており、独自な解釈の視点を提示することに成功している。

第４章の『テンペスト』論は、プロスペローの魔術をアナモルフォーズの実践例として解釈する。アロンゾーは息子のファーディナンドが劇冒頭の嵐の場面で溺死したと思い込んでいる。しかし、それはプロスペローの魔術が喚起したイリュージョンであり、劇の最後でふたたびプロスペローがアロンゾーに見せるファーディナンドの現実の姿と相容れない。プロスペローがアロンゾーに見せる二つの映像で、ファーディナンドは死んでいると同時に生きている。劇全体として一枚のアナモルフォーズが完成するという解釈であり、ひじょうに独創的な解釈である。口述諮問では、このような独自で大胆な解釈を提示するときにはとくに先行研究に意識的に言及し、解釈の正当性を示すことが望ましく、先行研究への具体的言及があれば説得力を増すと指摘された。

第５章は『冬物語』論であり、この劇でもまた、シェイクスピアは欺くという主題を扱っており、いくつかのイリュージョンをもち込んでいる。その典型はハーマイオニの復活の場面であり、イリュージョンと現実の区別が明確でなくなり、イリュージョンが現実に転換する。氏よると、これもまたマニエリスム美学の実践だという。

以上のように、５つの章で展開する氏の晩年劇の解釈はそれぞれひじょうに独創的である。全般的に先行研究への言及が少ないという問題が複数の審査委員から指摘され、その点で改善する余地はあるが、アナモルフォーズやだまし絵など議論の中心的概念をとり上げ、それをつかってシェイクスピア劇の解釈を刷新しようとする姿勢と意欲は高い評価に値する。解釈は氏の長年のシェイクスピアのテクストの精読にもとづくものであり、氏はテクストから詳細な具体例をとり上げて議論を力強く展開する力を十分に発揮している。本論文の解釈は、シェイクスピアの晩年劇に対する新しい視点を提供した点で顕著な学術的価値をもつが、さらに多くの情報と議論をとり込んでシェイクスピア劇全体に解釈を拡大していけば、きわめて独創的なシェイクスピア批評に結実すると予想され、今後の発展の可能性を秘めている点も評価してよい。口述諮問では、アナモルフォーズやだまし絵の意匠だけでなく、もっと広くマニエリスムの歪みの特徴をとり上げて論じてもよかったと発展の可能性が指摘されたが、これも今後の可能性を裏づけるものである。

学位論文作成計画書の提出から論文提出までの１年に及ぶ期間に、氏は口述諮問を含むさまざまな機会に審査委員の助言を受け、そのたびに原稿を大きく改稿した。改稿を重ねることで思索が深まり、注の量が増え、論文の質が高まったが、この過程を支えたのは氏の真摯な研究態度であったことはまちがいない。最終諮問では多数の質問が向けられたが、その１つずつに丁寧に答え、批判的指摘にも真摯に耳を傾けようとする姿勢が印象的だった。こ

れらの研究態度において研究者としての資質を備えていることも明らかである。

以上の審査の内容を踏まえ、論文と口述諮問の内容を総合的に判断した結果、審査委員一同は、雨森未来氏の学位論文が博士（文学）の学位の授与に十分に値すると合意したことを報告する。

以上